異海洋の航海者・異聞

入沢　康夫

そこはまこと海にはちがひなかったが
その表面は砂岩よりも堅かった
そこに七つの城が建ってゐて（と伝説は言ふ）
最大のものは雲にまでとどき
左はしの　最も小さなものは
人ひとりを容れるにも足りなかった（と伝説は言ふ）
右から三つめの城はすでに半ば崩れ

四つめのものに至っては土台のほか
跳ね橋の残骸しか見当らぬ（とこれはわれらの実見）
けれども数万の燕がその周囲を舞い狂ひ
しばしばわれらの子を　われらのまな子らを
われらの夢が産み落した　いなごの顔した子らを
ついばむのであった
西は革色に燃え　龍かと見える影が一瞬よぎった
そしてわれらは　牝山羊が人になるのを
おもむろに待つのであった